

平成 21 年 5 月 14 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2005～2008

課題番号：17520259

研究課題名（和文）メンタルスペース理論に基づく仏英日本語の時制対照研究

研究課題名（英文）Contrastive Research of French-English-Japanese tense systems based on Mental Space Theory

研究代表者 井元 秀剛（IMOTO HIDETAKE）
 大阪大学・言語文化研究科・准教授
 研究者番号：20263329

研究成果の概要：メンタルスペース理論の見地からおこなった、日・英・仏語の時制システムに関する対照研究。英仏語では **BASE** と呼ばれる話し手のいるスペース(時点)を基準として、そこを出発点にして **EVENT** と呼ばれる動詞で描かれる事態が生じるスペースが設定されるが、日本語ではまず、**EVENT** が設定され、最後に **BASE** の位置が定まる構造になっているという一般的な性質が導け、この一般原理によって日本語にみられる相対時制など、様々な言語間の違いが説明できることを示した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005 年度	1,000,000	0	1,000,000
2006 年度	700,000	0	700,000
2007 年度	700,000	210,000	910,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,100,000	420,000	3,520,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：メンタル・スペース理論、対照研究、時制、スペース、視点、過去形、条件文

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は修士論文以来一貫してメンタルスペース理論に依拠して言語研究、とりわけフランス語の研究をおこなってきた。この理論は本来名詞句の解釈をめぐる装置として受け入れられており、申請者が以前に受けた助成金もこの理論に基づく名詞句の指示をめぐる研究であった。しかし Cutrer によってこの理論が時制研究にも応用できることがわかり、関心を名詞句から時制へ広げていった。まず、大阪大学の学生達と私的研究会を行い、そこでの成果を第 25 回関西言語

学会ワークショップ『メンタル・スペース理論から見たテンス、アスペクト』を主催して発表した。その後、特に個人でフランス語の未来形や近接未来についての考察を行い、いくつかの論文を発表してきた。

対照研究という観点で具体的な翻訳データを収集し始めたのは 2004 年から 2005 年にかけてからであるが、仮説を提示するのに十分な量が一通りそろったので、2004 年 8 月イギリスの Averstwyth で開かれた第 24 回国際ロマンス語学会 (Congrès International de linguistique et de philologie romane) において発表が採用されたので「メンタルス

ペース理論の枠組みによる、英語の未来形とフランス語の未来形、近接未来形の意味領域に関する対照研究」(Étude comparative des champs sémantiques du “futur simple” et du “futur proche” en français, en comparaison avec le “futur” en anglais, dans le cadre de la théorie des « espaces mentaux »)というタイトルで発表してきた。ただ、対象はあくまで未来形にとどまり、資料として集めたデータも少なかった。これからさらに他の時制に対象をひろげ、また十分なコーパスを収集して本格的な研究を進めようと試みた。

2. 研究の目的

本研究で対象としているのはそれぞれ語族を異にする現代フランス語、現代英語、現代日本語の3つであり、本研究の目的はそれぞれの言語が個別にそなえている時制体系を、メンタルスペース理論に基づいて統一的に、一般言語学的観点から記述することにある。この目的を遂行するために、お互いに関連しあう以下の3つの具体的目標を設定した。

(1) 個別言語の記述

第一の目標は、個別言語における時制体系の精密な分析、記述である。理論的研究といってもその理論は事実の正確な記述の上に成り立つものであり、地道な用例の収集と観察は抽象的な理論構築の前にまず行わなくてはならない基本である。上記3つの個別言語の記述的研究はかなり進んだ段階にあるとはいえ、**quand**, **when**, 「～時」といった接続詞の前後にみられる時制制約など、細かい部分でまだまだ正確な観察と記述を行う要素は残っていた。

(2) 対照研究

第二の目標は、第一の目標の成果にもとづき、三言語の比較対象を行うことである。対照研究はともすれば、単なる図式の適応に終わり、Aの言語ではこうなっているが、Bの言語ではこうである、Aの言語の過去形の方がBの言語より守備範囲が広い、と言ったような現象面での対比に終始しがちである。しかしながら、理想的な対照研究は生成文法が「原理とパラメータのアプローチ」で志向しているように、様々な多様性や差違を生むより抽象的な原理を発見し、その原理におけるパラメータの違いとして差違が説明されるようなものであり、研究代表者は理論を通じてその種の原理を導くことをめざした。

(3) 理論的研究

第三のそして最終目標は第一、第二の成果

に基づき、メンタルスペース理論をより一般性のある時制体系記述の原理として整備することにある。この理論は当初は時制論としては未だ未完成であるが、上述したような細かい違いの生じる原理を体系的に記述する可能性を秘めていると代表研究者は信じており、その可能性を追求してみた。

3. 研究の方法

本研究は言語の実証的な観察に基づく理論的研究である。従って、データに基づき仮説を設定し、その仮説を検証するという作業と、それと平行して進められる理論的考察が研究の二つの柱であった。実証面では、良質のデータを以下の資料体から収集した。

(1) 電子コーパス、電子テキスト

本研究で対象としている三言語はすべてすぐれた電子コーパスが存在するので、その利用を計画している。電子コーパスを用いる利点は文体的な偏りをへらせること、すぐれた検索ソフトを用いて求める時制と接続詞の組み合わせなど高度なデータ収集が可能になることがあげられる。一方新聞などの電子テキストも同じ題材について書かれた三つの言語を比較する際に極めて興味深いデータが得られた。

(2) 文学テキストとその翻訳

時制の変換、微妙なニュアンスの表現など、特に時制の選択をめぐる古典的な手法ではあるが文学テキストの精密な観察が欠かせない。とりわけ古典的な作品は翻訳があるものが多く、翻訳を対象させることで言語間の違いが浮き彫りになってくる。文学テキストも著作権の切れた作品が **Gutenberg** 計画などで電子化されていることが多く、利用しやすくなっている。ただ、英仏語間の翻訳はなかなか電子データとしては不十分で、これらの利用は印刷されたものからスキャナーで取り込み電子化した上で行った。

(3) 作例

以上のようなデータの観察のほかに、検証の過程で作例を用いたインフォーマントチェックが欠かせなくなる。数人のネイティブスピーカーに適格性の判断を依頼して行い、資料を収集した。

理論面では研究図書の精読とその批判的な検証が中心となったが、主として研究代表者の思索によるところが大きい。

4. 研究成果

本研究の研究成果は後にあげる 21 年度の出版助成金を得て出版される著書『メンタルスペース理論による日仏英時制研究』において体系的に記述されている。ここではその章立てに沿って成果を紹介する。

(1) (図書第 2 章 テンス・アスペクト・モダリティ)

ここでは本研究が扱う諸概念の一般的な定義から始めて、メンタルスペースの操作概念の規定、さらに、この理論の観点からテンス・アスペクト・モダリティがどう扱われるかという方向で進めていく。この議論の中で、抽象的に規定される FUTURE の指標にフランス語の「未来形」はあてはまるものの、英語の will 形は当てはまらないというように、個別言語の時制形式の対照も扱った。

(2) (同 3 章 従属節の時制)

Cutrer (1994) によるいわゆる間接話法の時制について Cutrer (1994) が提示した問題を概観し、その問題点を指摘したうえで、解決法を前章の議論をふまえて展開した。英語やフランス語の場合、Cutrer の考えたアクセスパスは正しくなく、常に BASE から始まる者であることを示した。前章と本章の扱うテーマが主として目的の最初にあげた理論的研究にあたるものである。

(3) (同 4 章 日本語と談話構成原理)

本章と次章が代表研究者のオリジナルな主張に基づき展開される、本格的な対照研究に相当する。装置として用いるのは Cutrer (1994) が提案した「談話構成原理」であるが、彼女が提案した原理を日本語に当てはまるようにするには、いくつかの原理を逆転して適応しなくてはならないことを提案する。日本語と英仏語の間の大きな違いは、V-final 言語である日本語の場合、「述定の内容のあとに時制要素」が付加されるに対して、V2 言語である英仏語では、「時制要素の後に述定の内容が明示される」ことにある。V2 言語を基にした Cutrer の談話構成原理では、話し手の「今ココ」に相当する BASE と呼ばれるスペースから出発し、そこから述定の内容である EVENT と呼ばれるスペースに視点が移動するとされているが、日本語は逆に EVENT に最初の視点があって、視点は最後に BASE に戻ってくるというような構造になっているのではないか、というのが代表研究者のアイデアである。これによって、なぜ日本語では文章がイベントよりも記述され、過去のできごとの記述の中に現在形が頻出するのか、ということをはじめとし、英仏語と日本語の時制選択の違いが理論的に説明できるという主張が中心になる。

(4) (同 5 章 過去と仮定性)

この章も前章の内容を踏まえている。まず、多くの言語で仮定法の前件に過去形が用いられるのはなぜか、過去形と反実仮想性の関係をどうとらえたらよいのか、という問題意識からはじめる。そして、反実性と過去性との関係においても、日本語と英仏語では異なっており、英語やフランス語では if 節の内容を後置できるのに、日本語ではできないのか、という問題も含めて、過去性に対する理論的な考察を深めていく。

(5) (同 6 章 フランス語における《aller +inf》(近接未来))

この章と次章が個別言語の記述にあたる。この章では今までそれほど深く研究の対象にとりあげられてはいないが、メンタルスペースのアプローチが有効な説明を提示できるテーマとして近接未来の形式である《aller +inf》をとりあげた。この表現の様々な制約がメンタルスペースの規定でうまく説明が可能であることを示した。

(6) (同 7 章 フランス語の「半過去」)

この章では逆に、フランス語学の伝統の中で最も多く議論が重ねられてきた「半過去」の時制形態の分析に、メンタルスペース理論がどのようにアプローチできるかを問題にした。ここではあえて網羅的に「半過去」のあらゆる用法を検討し、それらがすべてメンタルスペースによる PAST+IMPERFECTIVE という規定で説明可能であることを主張した。

本研究の最大の主張をわかりやすく要約すると以下ようになる。日本語と英仏語の本質的な違いは語順の違いによるところが大きい。一般的に時制は動詞の語尾によって示されるが、英仏語のように動詞が主語の次にくる V2 言語では、語るべき事柄の全貌が描かれる前に動詞の時制によって、それが何時のできごとなのか示されてしまう。つまり、まず最初に枠組みを設定し、その後で事柄が述べられるのである。これに対し、日本語は動詞が文の最後にくる V-final 言語で、事柄が先に述べられ、その事柄がいかなる枠組みの中に設定されるか、ということは最後に定められるのである。「彼は書類に署名をし、自分で封をし、その上で、秘書に手渡した」とやると、聞いている方でも「書類に署名をし」の段階で情景を思い浮かべることができる。それが何時のことなのかは問題にならず、「秘書に手渡した」という一連の動作を描いた最後になって、これらが過去のことなのかとわかるのである。英仏語だとうはいかない。最初の署名の段階でもうこれは過去のことだと決めてかからないといけないのである。時間の枠組みの設定から中身の描写とい

う順序だと、時間の枠組みは話している位置を基準に定めるから、視点は語り手の「今」にあって、最後までこの「今」が記述の全体を支配する。一方、中身から始まって枠組みが後だと、どうしても出来事の中に身をおいて、語りの「今」からその出来事を相対化するの最後になる。日本語の視点が出来事よりになることの基本はここにある。

話法の構造も同じである。

- (1) a. He said^① that he would go^② to school the next day.
b. 彼は明日学校に行く^②と言った^①。

英語の場合、語り手の「今」を出発点とし、最初の出来事①が過去の枠の中で述べられると、今度はそこに視点が移り、そこを經由して次ぎの出来事②が述べられる。②の時制は左の①の時制の影響を受けるのである。ところが、日本語では②は①より左に来る。言語は一般に先に出てきたものが後から出てくるものに影響を与えることはあっても、逆は特殊な場合を除きあまりない。今の場合も②が①の影響を受けることは全くない。従って時制に関する限り、日本語に間接話法は存在しないので、自由間接話法の過去形は現在形で表現されることになるのである。

- (2) a. 駅に着いたら電話します。
b. When I arrive at the station, I will call you.
c. Quand je serai arrivé à la gare, je vous appellerai.

(2)の構造も日本語と英仏語で大きく違っている。(2)は「駅に着く」という事態Pと「電話をする」という事態Qとの二つの事態があり、Qが主節に置かれている、という構造は3つの言語に共通である。しかし、日本語におけるPの時間指定はあくまで次に移るQとの時間関係を示すのみであるのに対し、英仏語のPはQ同様、語り手の「今」から指定される。これによって、日本語においてPとQの位置を入れ替えることは不可能であるが、英仏語ではどちらを先にしてもよい、という事実が説明されることになる。しかし、それ以上に重要なのが視点と出来事との関係である。言語学で扱う時制論の多くは絶対的な基準点を語り手の「今」におき、(1)のような場合に、最初にあった基準点を一時的に移動して補助的な基準点を設定したりする。基準点の移動の要因は最初に述べられた事柄である。このとき、語り手の「今」→事柄①、というプロセスがまずあって(he said)、次にその事柄の位置に視点が補助的に移動し、補助的視点→事柄②というプロセスがとられる。この順番はほとんど普遍的なものの

ように専門家も漠然と考えてきたが、日本語の場合この順序も逆なのではないか、と本研究代表者は主張する。英仏語では主節と従属節を備える複文構造の場合、原則として(1)のように主節が先に来る。(2)も本来の語順はQが先行するもので、(2)はその倒置形である。それに対し日本語では従属節が先行し、従属節の時制は原則として主節時との関係を示すのみで、語り手の「今」との関係は主節を經由して間接的に示されるにすぎない。(2)の場合だと、事柄P→補助的視点の設定、というプロセスがまずあって、こうして設定された視点の位置(「駅に着いた」という事態を成立ずみと眺めている位置)に、主節の事柄Qが設定され、最後に事柄Q→語り手の「今」というように、主節が語り手の「今」との関係を与えられるということになる。つまり、事柄と時間指定のプロセスが全く逆なのである。

現在認知言語学における対照研究は、理論の図式を個別言語にあてはめ、現象面の違いをあげる段階にとどまっておき、なぜその違いが生じるのかを説明できる段階にはなかった。本研究は個別言語の違いを、抽象的レベルの原理からパラメータの違い(話し手の「今、ここ」の位置が談話の出発点であるか、最終点であるかというパラメータ)として体系的に説明する試みをおこなったものであり、一見無関係に見える様々な違いが、一般的原理からの帰結として説明可能なことを示すものである。これは生成文法ではすでになされているアプローチだが、認知言語学においては画期的なことであり、類似の研究は他になく、独創的な知見を得られた意義は大きいと自負している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5件)

- ①「「た」の過去性と過去の意味」(大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化共同研究プロジェクト 2008 : 言語における時空をめぐるVII』2009年5月, pp. 11-20.)
②「未完了は半過去の本質的属性か」(大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化共同研究プロジェクト 2007 : 言語における時空をめぐるVI』2008年5月, pp. 1-10.)
③「日本語の視点、英仏語の視点」(水声社『水声通信』19号, 2007年8月, pp. 88-97).
④「過去と仮定性」(大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化共同研究プロジェクト 2006 : 言語における時空をめぐるV』2007年5月, pp. 1-10).

⑤「英仏日本語における時制の基準点」『言語における時空をめぐって IV』pp. 1-10. (大阪大学言語文化研究科) 2006年5月

〔図書〕(計 3件)

①井元秀剛(単著), ひつじ書房、『メンタルスペース理論による日仏英時制研究』,2010年2月(現在印刷中), 240頁

②井元秀剛(共著),朝日出版社,『テキストの生理学』,2008年2月, pp. 167-180.

③井元秀剛(共著),朝日出版社,『シュンボン』,2006年3月, pp.13-22.

6. 研究組織

(1)研究代表者

井元 秀剛 (IMOTO HIDETAKE)
大阪大学・言語文化研究科・准教授
研究者番号: 20263329

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし